

活動報告書

報告者氏名： 近藤 創 所属： 香川県立高松養護学校 記録日：2020年2月10日

キーワード： 重度重複障害、観察、実態把握、コミュニケーション

【対象児の情報】

- ・ 学年
高等部2年 男子生徒
- ・ 障害名
A児：重度重複障害
- ・ 障害と困難の内容
A児：重度重複障害があり、コミュニケーションがとりづらいため、周囲に気持ちを押し量ってもらえない。

【活動目的】

- ・ 当初のねらい
自分の意思を言葉やジェスチャーで表出することが難しく、身体を動かすことも難しい、重度重複障害（重度肢体不自由と重度知的障害の重複障害）のある対象生徒は、周囲が意思をくみ取ることが難しいと思われてきた。しかし、Oakを用いた観察により、振動を感じると動きを減らすことや、保護者の運転する車の音を聞いて動きが減ったことがわかり、生徒の気持ちの動きを周りが知ることが少しずつできるようになってきている。
今年度、対象生徒や他のクラスの重度重複障害のある子供たちの生活や生徒の気持ちについてさらに知っていきながら、彼らの遊びに考えていきたいと思っている。そもそも遊ぶというのはどういうことなのか、重度重複障害の生徒にとっての遊びとは、どのようにアプローチをしていけば彼らの（特に一人で過ごす）時間を豊かにできるのかに迫っていきたいと考えた。

- ・ 実施期間
2019年4月より一年間
- ・ 実施者
近藤創（特別支援学校教諭）
- ・ 実施者と対象児の関係
担任

【活動内容と対象児（群）の変化】

・[遊びに関する生徒の最初の実態]

① 外界の変化の理解の程度

視力：医療機関の診断や、過去の担任や保護者の聞き取りでも本人がどのくらい見えているのか詳しくはわかっておらず、見ることで変化を理解できるかどうかは現時点で分からない。

聴力：特定の音（太鼓や鐘の音のような響きのある音）を聞くと動きを止めたり目を開けたりする姿が見られることがわかってきた。

身体：マッサージ器の振動や風を身体で感じて、目を開けたり自己刺激を減少したりする姿が確認できている。

② 自分の動きと随意性

現時点で把握している随意性のある動きとして、歯と唇の感触遊びが挙げられる。普段はひとさし指と中指を歯と唇の間に当てて感触を味わっている。

その行為の途中、鳴子やゴムのおもちゃをその手に持たせると、歯と唇の間にそのおもちゃを適度な強さで当てて感触を何度も味わっている姿が見られる。手に持っているものの大きさを身体感覚を用いてか視力を用いてかはわからないが、正確に距離を測って口に当てていると思われる。

③ 遊びを阻害していると思われるもの

○姿勢について：車いすに座った状態だと、極度に体を曲げて下向きの姿勢を取ることが多く、その際目をつぶっていることが多いことから眠っていると誤解され、場面を設定される機会が少なかったと思われる。

体調、生活リズムについて：一晩中起きて興奮したり、学校で眠っていたりすることから昼夜逆転の生活リズムになっていて、大人と遊びを構築する機会が失われていたかもしれない。

○周囲の理解：生徒の過ごしやすい環境や生徒に届きやすい伝達方法などの情報がまだ把握や整理しきれておらず、周囲の環境が変わるたびに、「環境設定や生徒に対する理解」を引き継いだり深めたりしづらい面がある。

・活動の具体的内容

① 保護者や教員のチームで生徒について、エピソード集めや観察を行う。

② 重度重複の障害がある生徒がどんな刺激に反応があるのか、どんな環境で反応が出やすいのか、その生徒はどの感覚が伝わりやすいのか、どういった環境だと落ち着いて余裕がある状態なのかなどを観察し理解を深めていく。（観察にビデオや iOak を用いる）

③ ①で集めた情報と②で分かった生徒の実態をもとに生徒にとっての次の一手について考える。

④ 次の一手を実施しながら、生徒の実態に合わせた遊びを考え、カスタマイズする。

⑤ 実践をする中でわかったことや気づき、疑問を元に、②、③、④を繰り返しながら深め、生徒についての理解、生徒にとっての遊びを探っていく。

⑥ 実践で分かった子供の実態や子供に遊ぶことが、大人のためではなく、子供たち自身が健康的で輝けるための行動になるように、また、卒業後にもつながっていけるような力になるように周囲の大人や本人が守るべき運営ルールを考える。

※重度重複障害がある子供たちは身体的認識面でも一人一人異なった特徴があると考え。そこを正しくしっかり把握したうえで、生徒の心に届き、時間を豊かにしていくような遊びを見つけ、設定できるようにしていきたい。そのために、生徒に接する保護者や他のクラスの先生など違った視点で子供を見ている

人たちと意見を交換しながら進めていきたい。

また、遊びについて、生徒が落ち着いて、余裕がある状態を見極め、おだやかに活動に参加できる状態を見極めたうえでそれぞれの感覚や興味、刺激などに訴える活動に取り組んでいく。その活動の中で反応があった場合はそれらのどの部分が彼らに響いたのか、要素を取り出すことで彼ら一人一人の強みや楽しさの本質に近づいていけたらと考えている。

【活動内容と対象児の変化】

・活動の具体的内容

- ① 保護者や教員のチームで生徒について、エピソード集めや観察を行う。
- ② 重度重複の障害がある生徒がどんな刺激に反応があるのか、どんな環境で反応が出やすいのか、その生徒はどの感覚が伝わりやすいのか、どういった環境だと落ち着いて余裕がある状態なのかなどを観察し理解を深めていく。(観察にビデオやiOakを用いる)
- ③ ①で集めた情報と②で分かった生徒の実態をもとに生徒にとっての次の一手について考える。
- ④ 次の一手を実施しながら、生徒の実態に合わせた遊びを考え、カスタマイズする。
- ⑤ 実践をする中でわかったことや気づき、疑問を元に、②、③、④を繰り返しながら深め、生徒についての理解、生徒にとっての遊びを探っていく。
- ⑥ 実践で分かった子供の実態や子供に遊ぶことが、大人のためではなく、子供たち自身が健康的で輝けるための行動になるように、また、卒業後にもつながっていけるような力になるように周囲の大人や本人が守るべき運営ルールを考える。

※重度重複障害がある子供たちは身体的認識面でも一人一人異なった特徴があると考えている。そこを正しくしっかり把握したうえで、生徒の心に届き、時間を豊かにしていくような遊びを見つけ、設定できるようにしていきたい。そのために、生徒に接する保護者や他のクラスの先生など違った視点で子供を見ている人たちと意見を交換しながら進めていきたい。

また、遊びについて、生徒が落ち着いて、余裕がある状態を見極め、おだやかに活動に参加できる状態を見極めたうえでそれぞれの感覚や興味、刺激などに訴える活動に取り組んでいく。

その活動の中で反応があった場合はそれらのどの部分が彼らに響いたのか、要素を取り出すことで彼ら一人一人の強みや楽しさの本質に近づいていけたらと考えている。

・実践

- ① 観察から生徒の動きや反応を録画して観察することで見つけその要素を分解しながら次の一手を考える。
 - ② エピソードを詳しく分析し生徒の反応について考え、その原因や背景を理解できるようにする。
- (1) 指を口元に持っていく様子から

○指を口元に持っていくという行動についていろいろな角度から、要素を分けて考える。

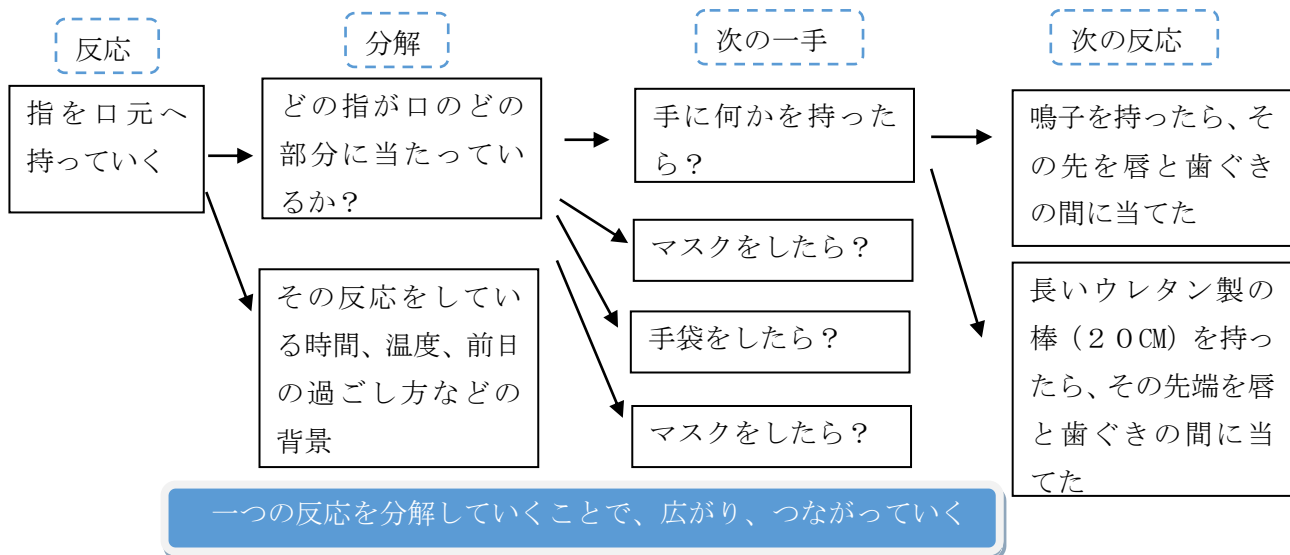
- ・持っていく指はいつも同じ？右手と左手に差異は？
- ・唇、指のどちらがより気持ちいい？
- ・におい？音？味？
- ・指を当てている先は舌？唇？歯？
- ・手に物を持ったらどう？



次の一手

○鳴子を持つと、鳴子の先を口元に持っていった。

- ・鳴子をしっかり握り、落とすことなく持つことができる。
 - 物を握ることができる、物を握っていることがわかっている。
- ・鳴子の先を唇と歯ぐきの間に当てようとしている。
 - 手に持った鳴子の大きさや長さ、唇までの距離を把握できている？
- ・鳴子より長いものを持ったらどう？などの次の一手へ続いていく。



(2) 保護者に聞いたエピソードから

スタート 保護者からのエピソード「休みの日に法事があって大喜びしたんです」

- ①「法事で喜ぶ」というエピソードを考える → 法事と一言と言っても色々な要素がある喜んだのは
 - ①どの場面？（ご飯？読経？鳴り物？移動？などなど）
 - ②一緒にいる人は関係ある？（親戚？家族？お坊さん？）
 - ③保護者が言う喜ぶは、そもそもどんな状態？（笑っている？声が出る？）
- ②保護者と一つずつ確認
 - ①場面は読経中
 - ②一緒にいる人は関係ないようだ
 - ③喜ぶというのは、穏やかな表情で聞き耳を立てている状態。声を出して笑っている状態ではない。

- ③読経の状態を学校で実演し、生徒の様子を見る

読経の状態を実現するために iPad アプリ「ぜんおと」を使用。



禅音:ぜんおと (4.5)
 座禅と仏教音楽アプリ: 癒やし・集中・マインドフルネスに
 yuichi oyama
 4.5/5.0 56件の評価
 無料

- 体を左右に動かす自己刺激をしている最中に、「ぜんおと」を利用して法事と同じような読経を流す。



ぜんおとスタート



身体を左右に揺らし大きな声を出す自己刺激



ぜんおとの音に気が付く



次第に動きが減少する



動きが止まり、声も出さず、音に意識を向けている

「ぜんおと」の音は、生徒の意識が向くことがあることがわかった。

④「ぜんおと」の要素を分解して考える

- (1) 「ぜんおと」の発する音 → 読経と鐘の音
- (2) 同じ条件で読経のみで実施 → 動きの変化が少ない
- (3) 同じ条件で鐘の音だけで実施 → 動きが減少し、音に意識を向けている様子があった
- (4) 生徒が注意を向ける音は鐘の音であることがわかった

⑤次の一手を考える

- (1) 鐘の音から考えられる次の一手として、他の打楽器を試す→太鼓をたたくと同じように注意を向け、聞き入ることがわかった。
- (2) 太鼓の音の何が生徒にとって注意を惹くのか考え、次の一手として弦楽器を試してみる予定。
- (3) 校外学習で寺の鐘を聴きに行く予定。

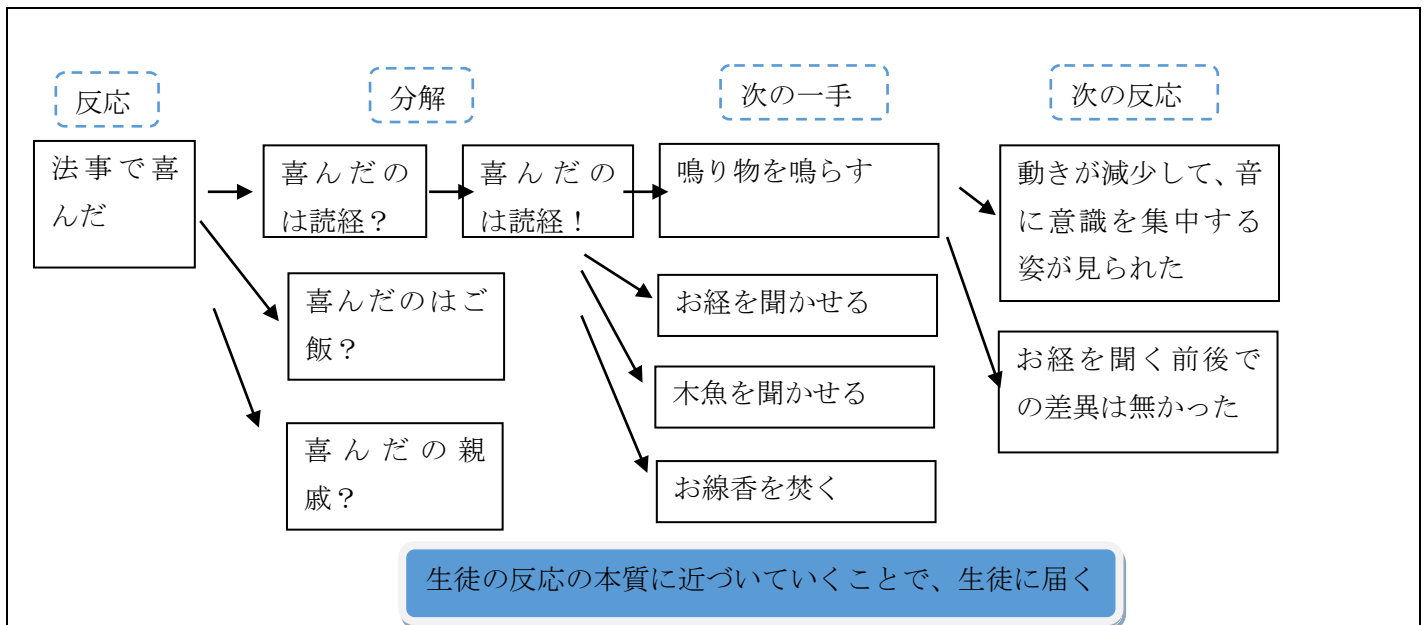
⑥エピソード

保護者からの話「夜 興奮しすぎて盛り上がっているときに、先生の話を出して、太鼓の動画を聞かせたらじっと聞き入って、そのあとずっと眠ったんです。」

→ 自分で盛り上がって、楽しく興奮していたが、お母さんが、違う興味の刺激をくれた。

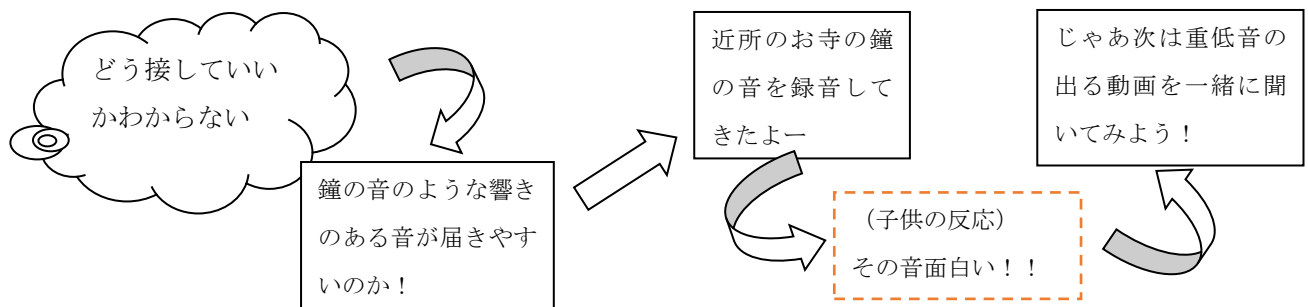
それが興味深くて注意を向けるうちに、穏やかな気持ちに切り替えることができた。

→ 「まあまあ。ちょっと落ち着いてみたら？」という保護者から生徒に向けての思いを、言葉を介さない穏やかな手段で伝え、届くというコミュニケーションが成立した。(今までは言葉掛けや環境を変えるなどの手段でコミュニケーションしようとしていたが、届かないケースが多かった。)



生徒に届くことがわかると、輪が広がっていく！

接し方がわからず悩んでいた若手職員の心理的变化



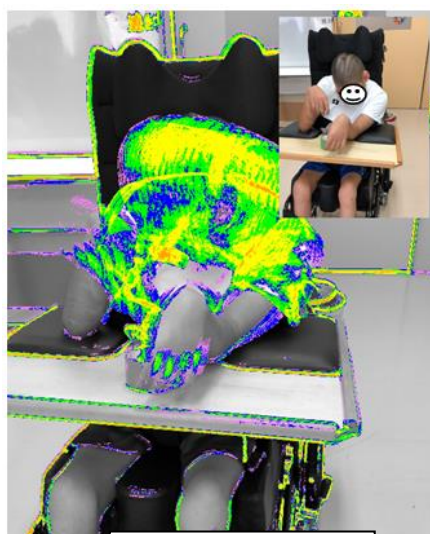
「どう接していいかわからない」から「あれもこれも一緒にしてみたい」に！

【今後につながる】

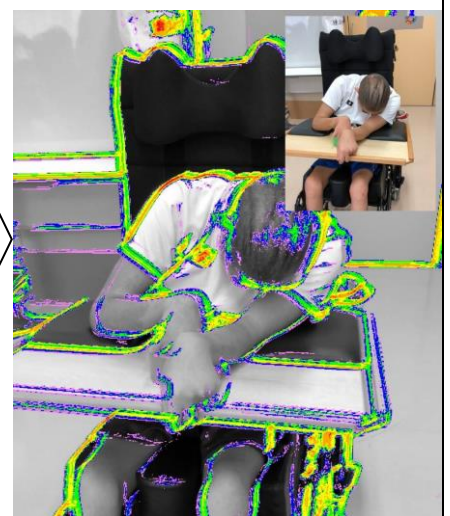
○手を口を持っていく動きで、手について観察を深めていく。現段階では手に物が触れるということを感じていることがわかっている。そこで、素材を変えていきながら生徒の手の動きを観ていく予定。



手に物が触れた状態を OAK カムで確認



上半身の大きな動き

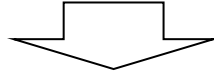


物に触れて三秒後

上肢の動きが減少したことがわかる

【今回の実践を通して考えていること】

- ・子供と面と向かってではわからない、見えない、見逃すことも機器を使って拾うことができる。
- ・見つかった反応を分解していけば、反応の背景に近づくことができ、より効果的な次の一手に気づきやすい。
- ・重度重複障害の子供たちの学習は、「教えて育てる」だけではなく、今回のように「観て周りが気づくことで結果本人の生活が変わる=成長」ということも大切だと思う。



ワクワクしながら宝物を探すような気持ちで子供のことを観ることができるように
手の動きを見つけ、そこから生徒の活動が広がっていく



机のふちを触っている指の動きからスタート



ビニールの袋があったら？



ボールではどう？→指先で感触を試している



楽しい活動になっていった

【学校で子供を観るということ】

K君の保護者からの発言

「今年になって夜、家でよく寝るんです」

去年との違いとして、周りの大人が観察によりK君に届く刺激を知ることができ、学校で授業や休み時間などの際にやり取りをすることができたため、K君がしっかり疲れることができた結果ではないか？これは自立活動の内容・【1 健康の保持 1 生活のリズムや生活習慣の形成に関すること 2 心理的な安定 1 情緒の安定に関すること】にしっかりとあてはまると考える。ほかにも、観察により、本人に届く刺激を見つけたり、本人のできる活動を見つけていくことは【4 環境の把握 1 保有する感覚の活用に関すること 5 身体の動き 1 姿勢と運動 動作の基本技能に関すること】に当てはまる。

このように、子供を観察し、分析していくことで次の一手を考えていくことは、指導要領の自立活動の内容に当てはまる、とても大切なことだと考えられる。